
 介 *****

鈴木 七美 著

『癒しの歴史人類学 ハーブと水のシンボリズムへ』

本書は、『出産の歴史人類学 産婆世界の解体から自然出産運動へ』(一九九七年、新曜社)によって、出産の近代化過程とそれへの対抗文化としての代替医療を主体とする自然出産の歴史を論じた著者による「癒し」の文化の歴史人類学的考察である。前著が著者の博士學位論文であったこともあり、歴史的経過とその構造的把握、およびそれを支える理論的展開が前面に出ていることに比して、本書は、同じく学術研究書としての論理性や歴史的展開は十分意図されつつも、それらを意識的に表出するよりはより基層化し、むしろ現在において諸方面から関心が寄せられている「癒し」をテーマ化した点で特徴的である。

本書は、「序章」「終章」の他に六章より構成されている。「序章」では、「癒し」という概念に現代社会が多大な関心を寄せている現象を素描し、そこに著者の一貫したテーマともいべき近代の科学的医学とその対抗文化としての代替医療あるいは自然医療の系譜の相互関係を書き込んでいく。そして、そこから全体の研究構成を示していくが、そこで著者は自らの方法論をフーコー、Mとの近似性の中でとらえている。

第一章「癒しの語源学」、第二章「養生の系譜学」は「癒し」の語源の多様性とその中で中心概念ともいべき「養生」の概念を持つ含意を検討していく。第一章での方法論は辞書的な検討であり、第二章での検討史料もヒポクラテスやガレノス、サレルノ養生訓、莊子とこの領域ではよく知られたものであり発見的考察というよりは確認的考察に近い。結論的にもフーコーの『性の歴史』とさほど隔たっていない。「養生」とは、人間の文化そのものを指し示す」という見解は首肯されるものであるがフーコー的な典型である。

第三章「人を知り運命を占う」、第四章「ペルソナとしての骨相と人相」は、分量的にも前二章の比ではなく、史料の博搜度も記述の精密度も格段の深化を示す。「第三章」では十七世紀から十九世紀にかけて多くの著者を獲得した『アリストテレスのマスターピース』を基本資料としながら、民間医学の中に人間理解の手段としての観相術、手相術、夢判断などが用いられていたことを明らかにする。それは、人間の表層を観察することにより人間の内奥としての魂に触れる技から「疑似」科学としての骨相学や人相学へと展開していくことを示していく。そしてこの過程で著者の原基的テーマであるハイドロパシーとハーバルメディシンへの導入がなされる。

第五章「癒しの磁場」、第六章「植物の癒し」は、アメリカ合衆国で十九世紀前半から起こったポピュラー・ヘルス・ムーブメントを縦糸としながら、水治療法(ハイドロパシー)とトムソニアニズム(植物治療法)を代表とする、こんにち

「代替医療」「補完療法」と称される治療法の歴史的展開を記述し、まさに副題にいう水とハーブのシンボリズムを織り込んでいく。ここはまさに著者の独壇場である。特に第六章では薬学者でもある著者の自然薬物への博識が披瀝され、メツセゲの植物療法やハーネマンのホメオパシーなどの理解に大いに学ばされるものがあつた。

「終章 〈癒し〉のプロブレマティク」では生殖医療技術の現代的動向に触れながら、本書で取り上げた世界が指向する「魂への配慮」としての養生のあり方と自然性と靈性の再獲得を論じている。代替医療の現代的評価が著しい現代において、養生の意義とその展開の多様性を示した本書のあり方にわが意を得たと思うのは評者だけではない。

(瀧澤 利行)

〔世界思想社、京都市左京区岩倉南桑原町五六、電話〇七五—七二—一六五〇六、平成十四年三月三十日、四六判、二九八頁、一九〇〇円〕

小高 健 編

『長與又郎日記 近代化を推進した医学者の記録』

本書は、近代日本の医療行政・衛生行政の基礎を築いた長與專齋の三男で、東京帝国大学総長をつとめた長與又郎の日記とその解説からなる著作である。編者の小高健氏は長與

又郎も深く関与した伝染病研究所の後身である東京大学医学研究所の教授をつとめた。すでに著者は『傳染病研究所』(学会出版センター刊)によってこの間の事情を著している。長與又郎についてはすでに戦前の昭和十九年に『長與又郎傳』(長與博士記念会)が刊行されているが、本書は長與自身の膨大な日記をもとに、編者による詳細な註と解説が章ごとに付されている。これをもつてしても、本書が長與又郎について知るための第一級の原史料であると同時に研究書であることは言をまたない。

本書は上下二巻よりなり、上巻六六〇頁、下巻六六四頁の計千三百二十四頁の分量である。通読だけでも相当の時日を要すると思われた。しかし、評者は上下二巻をほぼ二日で読了した。もちろん、一日のほとんどを費やしてではあつたが、これは評者の読書力を誇るのでは決してない。それほど面白くまた感慨深く読めたのである。

同書の上巻は長與の出生、幼少時、東京帝国大学医科大学の修学時代、助手、講師、助教教授、そして三十三歳の若さで病理学教室の教授となるまで、そして伝染病研究所の兼務時代、恙虫病の実地調査、伝染病研究所所長時代、医学部長時代、癌研究会会頭、帝大野球部長、国立公衆衛生院の設立など二十二の章よりなっている。主として長與の東京帝国大学総長就任以前のことを中心に書かれている。

下巻は昭和九年十二月に東京帝国大学総長に就任して以来、昭和十六年八月に逝去するまでの間を二十の章で構成し